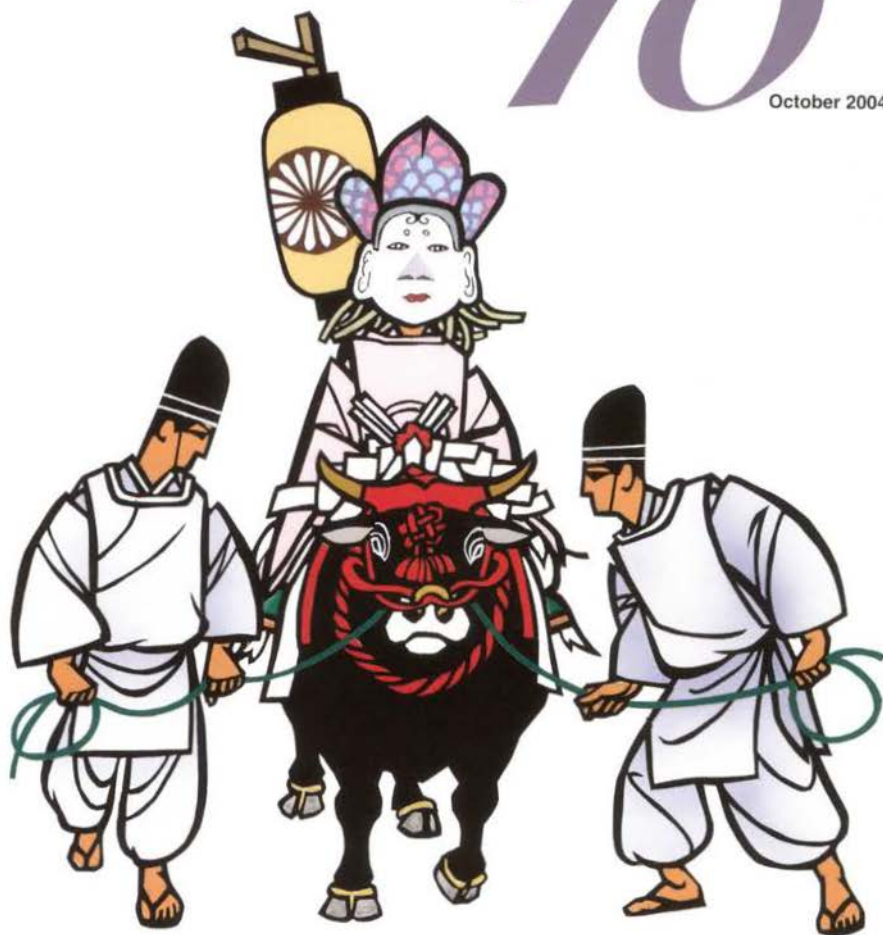


浄土

monthly
JODO

10

October 2004



法然上人鑽仰会



昭和55年6月号



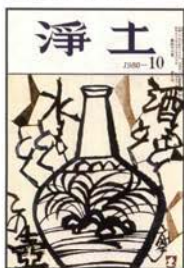
昭和55年7月号



昭和55年8月号



昭和55年9月号



昭和55年10月号



昭和55年11月号



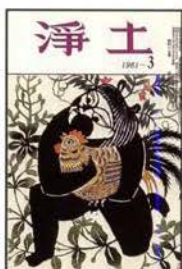
昭和55年12月号



昭和56年1月号



昭和56年2月号



昭和56年3月号



昭和56年4月号



昭和56年5月号



昭和56年6月号



昭和56年7月号



昭和56年8月号



昭和56年9月号

浄土

2004/10月号 目次

法然上人と私	井澤隆明	2
お十夜 法話	慶野匡文	10
会いたい人 木場勝己①	関 容子	16
響流十方	林田康順	24
シネマ随想「春夏秋冬そして春」	袖山榮眞	28
表紙のことば	石川忠夫	31
日本酒のことば 日本酒のじかん	藤原理加	32
連載 法然上人をめぐる人々	石丸晶子	34
Jフォーラム		41
誌上歌集		42
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ『さっちゃんねッ!』	かまちよしろう	47
編集後記		48



表紙題字=浄土門主 中村康隆 祝下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

井澤隆明

と法然
私上人

私は、寺で生まれ育ったので、小さい頃より法然上人の話は、耳に入っていました。

本格的に法然上人の人物像や、教えを勉強することになったのは、昭和四十三年大正大学に入学してからですが、大学の講義で学ぶというより、大学の講演部というサークルで知識が深まりました。

この講演部は、夏休み中の「伝道旅行」を最大の活動にして、日常はそのための討論会、意見発表会などを重ね、理解を深め合うという日課でした。

夏休み中、全国各地に三、四名の班を編成して伝道活動をするのですが、私は三年間で北海道・九州・山陰地方を回りました。

もう三十五年も前のことになりましたが、北は日本最北端稚内市宗谷村護国寺さま、釧路大成寺さま、札幌新善光寺さま、南は鹿児島市断光院さま、長崎五島列島西方寺さま等々、まだまだ多くの寺院さまのお世話になりました。

まだ二十歳前後の将来僧侶になろうという学生に、本堂を開放し、多くの檀信徒を集めていただき、なおかつ学生の法話の後に、それをフォローしてお話をいただく、何とも頭の下がることばかりでした。

このようなご住職さまや檀信徒に育てられ、今日の私があるんだと、感謝の心で遠い遠い昔を思い出しております。

伝道旅行中、私は浄土宗所属ということで、浄土宗寺院での法話が中心となるのですが、まず驚いたのは、全国隅々まで、至る所に浄土宗寺院があり、法然上人の教えが語られ、念仏を申す多くの人に出会ったことです。

これは当時、田舎育ちで自分の周囲しか知らない私にとって、実に不思議なことである

と同時に、大いなる感動でした。

このようなことが契機となり、より一層法然上人という人物に興味を持つようになったのです。

浄土正宗統の伝記本とされる『勅修御伝』（『四十八卷伝』）を何度も読み返し、法然上人の生涯と教えに、より深く触れることとなりました。

そこで感じたのは、法然上人の包み込むような、おおらかな、温かい人柄と、反面きびしい信仰態度であります。

阿弥陀さまの本願に絶対の仰信を寄せ、称名の一行に徹する宗教的立場に立脚し、その強い信仰に裏づけされた、和やかな、円満な人柄が多く、門弟を育て、民衆を教化されたのです。

このような法然上人の人柄が偲ばれるものを、伝記や法語の中から、いくつか述べてみましょう。

世事にとらわれず只念仏を

法然上人と一般庶民との間に交わされた、日常生活とお念仏についての質疑応答が記載されている『百四十五箇条問答』に、

一心に阿弥陀仏を念じたならば、善い心にならなくても、またいろんな修行をせずとも、念仏だけで浄土に往生できるでしょうか。

答、心が揺れるのは凡夫の習性で、どうにもなりません。一心に念仏すれば、その罪は消滅して、必ず往生されます。

菰・葱・蒜や肉を食べて、においが消えなくても、つねに念仏はとなえてよいでしょう

か。

(答) 念仏には差し障りがありません。

酒を飲むのは罪でしょうか。

(答) 本当は飲んではいけないのですが、この世の習慣です。

「酒のむはつみにて候か」との問いに、「まことには、のむべくもなけれども、この世のならない」と言い切ってしまう強さとおおらかさは他の宗教者には見られないものです。

同様の記述が、同時代に生きた吉田兼好の『徒然草』に見られます。

或人法然上人に、

念仏の時むす睡におかされて行をおこたり侍る事、いかがして此さわりをやめ侍らんと申しければ、目のさめたらんほど念仏し給へとこたへられたりける、いとたふとかりけり。

又往生は一定と思へば一定、不定と思へば不定なりといはれけり、これもたふとし。

また疑ひながらも念仏すれば、往生すともいはれけり、これも又たふとし。

実に法然上人の人間性を見すえた温かい、懇切な指導が見られます。

他にも『十二箇条問答』には、

現世を過ぐべきようは、念仏の申されん方によりてすぐべし。念仏の妨げになりぬべからん事をばいとい捨つべし。

このように、本願を愚おろみ念仏を中心とした生活が肝要である旨を述べています。

法然上人の人間観は、見つめれば見つめる程、掘り下げれば掘り下げる程に、罪深い人間としての自覚であり、さらにたとえそれに気づいても、なお生きているかぎり、またまた罪を重ねていく罪業深重の凡夫の姿でありました。だからこそ弥陀の本願を信じ、常に

懺悔し往生を願ひ続けるために、念・念・相・統・の・称・名・念・仏・をすすめられたのです。

世事にふり回されることなく、ありのままに、自然態で、おおらかに念仏中心に生活していくことの大切さを教え導かれたのであります。

流罪は朝恩

さらに法然上人の人柄について注目される出来事があります。

晩年の法難のうち、特に「建永の法難」として知られる、法然上人四国への流罪に対し『勅修御伝』には次のように記されています。

流刑さらにうらみとすべからず、そのゆへは齡すでに八旬にせまりぬ。……しかのみならず念仏の興行、洛陽にしてとしひさし、辺鄙におもむきて、田夫野人をす・めん事季来の本意なり。しかれども時いたらずして、素意いまだはたさず。いま事の縁によりて季来の本意をとげん事、すこぶる朝恩ともいふべし。

さらに続いての記述は

また一人の弟子に対して、一向専念の義をのべ給に、御弟子西阿弥陀仏推参して、「かくのごとくの御義、ゆめゆめあるべからず候。をのをお返事を申給べからず」と申ければ、上人の給はく「汝経釈の文をみずや」と、西阿申さく、「経釈の文はしかりといへども、世間の機嫌を存するばかりなり」と。上人又の給はく、「われ、たとひ死刑にをこなはるとも、この事いはずばあるべからず」と

長い人類の歴史の中で、為政者の弾圧により島流し、死罪や、さまざまな圧政が繰り返されてきました。皆、怒り・うらみ・呪って獄門への重い足を運びましたが、法然上人は違っていました。島流しは、今まででできなかった地方に念仏を弘める絶好の機会でありま

す。この機会を与えてくれたことを考えれば、これもひとえに朝恩といわねばならないと、逆縁を前向きに順縁に受けとめる器量の大きさが知られます。

思えば、法然上人は九歳で目の前で父を斬殺され、このことが契機となり僧への道を歩みはじめ、さらに最愛の母とも別れ比叡山へ、その比叡山においても、求めるものに邂逅することなく、二十八年もの間求道の遍歴を続けるのです。まさに逆縁の連続の中から確立した信仰であり、振り返って見れば、弥陀の本願に出会う機縁であったのかもしれない。

そしてお伝記はさらに、法然上人が配所に下だるに際して、専修念仏の最後の説法をはじめられたが、念仏停止ちやうじの命令を受けた直後なので、弟子の西阿さいあが「世間のおもわくも考えねばなりません」と説法をやめさせようとしたことに、「私はたとえ死刑になろうとも、お念仏の教えをひろめることは止めません」ときっぱり申されたのです。

この言葉ほど、法然上人のきびしい信仰態度を表しているものはありません。たとえどんな権力をもつてしても、私の念仏の信仰を止めることはできないことを、はっきりと宣言したものです。法然上人においては、念仏があらゆるものを超えた絶対的な価値であり、力であったのです。

この毅然とした信仰態度は、柔和な温顔とは何か一線を画すようではありますが、弥陀本願の大海に身をせずめ、称名一行に徹された確固たる信仰の表れであり、それに育まれた高潔で包容のある人格が多くの人々を教誨したのであります。

多くの門弟・信者を育てる

法然上人ほど、天皇・貴族・武士から乞食・遊女・泥棒に至るまで、あらゆる人々に男

女の差別なく接し、教化された人はいないと言われます。

門弟もまた、多士^{たし}さいさいであります。

浄土宗第二祖となられた鎮西聖光上人は、天台宗の大学者として初めて法然上人に会い、浄土の法門を十時間話し合った時のことを、「大きな山の前に座ったようだった」と、後に述懐されています。

また、浄土真宗の開祖親鸞聖人は『歎異抄』の中で「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひと（法然）のおほせをかぶりて信ずるほか別の子細なきなり」と、絶対帰依の心情を吐露しています。

いずれも学問・知識だけではない、仏とともにいきる（安心立命）人間のすばらしさ、大きさを肌で感じられたのでありましょう。

このように法然上人のご生涯のほんの一端を知るにつけ、その生き方から学ぶことは、はなはだ多いのです。

ところで現代日本の社会は、うわべは世界有数の経済大国で、高度情報化に代表される物質文明の花が咲きほこっているかのようです。しかし、その内面を見ると、政治の貧困、家庭・学校の崩壊、少子高齢化、治安の悪化、長引く不況・自殺者の増大、個人主義による共同体意識の希薄等々、まさに憂慮すべき多くの問題を抱えています。

まさに未来の見えない時代ともいわれます。明るい未来が見えないからこそ、四割の人が年金を納めないというのが現代の姿です。

そして、利根的に一度きりの人生だ、それ楽しまなくてはと海外旅行へ、他人にはかまってはられない、自分さえよければという利己主義が蔓延し、マスコミには毎日のよう

に殺人事件や各種の犯罪が報道されています。

まさに現代は、表面の華やかさとは裏腹に、その裏側では經典に説く五濁惡世の言葉どおりではないでしょうか。

愚者の自覚、法然上人、立教開宗の原点に立って教化に取りくまなければなりません。

私は、機会あるごとに「法然上人のご生涯に学ぶ」とのテーマで話をします。

先に述べたように、苦難の末に弥陀の本願に出会い、深く信じ、それを相続するために称名一行に徹し、日に六万遍の念仏を申された法然上人のすさまじい念仏の実践の上に確立された高邁な人格こそが教化の源泉なのです。

混迷する現代社会において、頭にきた、キレたと言っては相通うことのないかわいた心に、み仏の慈光につつまれ、みずみずしい心で生きるすばらしさを教えてくれた法然上人の芳香を多くの人に伝えてゆきたいものです。

浄土宗の宗風は、まことに和やかとよく言われます。これは八百年の間、法然上人の人格が外柔内剛・温容玉の如しと脈々と伝えられてきているからなのです。

私は、これからも法然上人のご生涯に学び、伝えてゆくつもりです。

いざわりゆうみょう

昭和24年8月14日生

55歳

山形教区東北上組

稱念寺住職

昭和53年大正大学大

学院博士課程修了

浄土宗宗議会議員

浄土宗常任布教師

総本山知恩院常任布

教師

大本山増上寺布教師

山形刑務所教誨師

保護司

お十夜

法
話

慶野匡文

総本山知恩院布教師
大本山増上寺布教師
大本山光明寺布教師
神奈川教区教化団副団長

弥陀の本願を決定成就して、極楽世界を莊嚴したてて、御目を見まわして、わが名をとなうる人やあると御覧じ、御耳をかたぶけてわが名を称する者やあると夜昼きこしめさるるなり。されば、一称も一念も阿弥陀仏に知られまいらせずという事なし。(示或人詞)

すっかり秋らしくなりお十夜の季節を迎えました。私の住んでいる神奈川県では、大本山鎌倉光明寺をかわきりに、各寺院でお十夜の法要がとめられ、夕暮れ時ともなりますとお念仏の声が響き渡っていきます。このお十夜法要は、阿弥陀さまが、私どものことを何としてでも救いとうとされて誓われたご本願を成就し、極楽浄土をおつくり下さったことに感謝のまことを捧げ、お念仏を申すという法要であります。

阿弥陀さまという仏様は、大勢いらっしゃる仏様の中でも、私どもに最も近い、親しい仏様であります。何故ならば、この私ども

を救うために仏になられたからであります。私どもは毎日のように、自分のことばかり考え、欲の追求に励み、自分で苦しみの原因をつくりながら、そのことにも気づかず暮らしているおろかな存在です。この命終われば、次の苦しみの世界に生まれる。いつまでたっても永遠に地獄道や餓鬼道、畜生道などをわたりゆく救われない存在なのです。阿弥陀さまは、そんな私どものことを哀れんで、考えに考えぬき、あらゆる修行をおさめ、全ての功德を南無阿弥陀仏のお名号にたくし、それをただ称えさえすれば極楽浄土に生まれるようにして下さったのです。もしこの願いがかなわないならば、自分は仏にならないとまで誓われたのです。その願いが成就したことをお喜び申し上げる法要、それがお十夜法要なのです。もし成就できていないなら、阿弥陀さまという仏様は、今いらっしゃらないことになります。いかに、阿弥陀さまがこの私のためにいらして下さるか、常に私を思ってお

導きいただいて下さるか、おわかりいただけ
ると思います。

ですから、冒頭に示した法然上人のお言葉
も、ありがたく、あたたかいお言葉としてい
ただけるのであります。「阿弥陀さまはご本
願を成就し、極楽浄土をつくられ、お念仏す
る者を何としてでも迎えようとしています
よ。そして、御目を見まわし、わが名を呼ぶ
者はいないかと御覧下さっておりますし、御
耳を傾けてはわが名を称える者はいないかと
夜でも昼でもどんな時でもお聞き下さって
おりますよ。たった一言すら聞き逃すことなど
ありませんですよ」と力強くお諭し下さって
いるのであります。

お念仏のみ教えのありがたい所は、具体的
に阿弥陀さまがいまして下さり、西方という
具体的な方向が示され、私どもを連れて生ま
れさせていただける極楽浄土が具体的にある
ということです。命つきればお迎えいただき、
極楽浄土では直々にお説法下され、最後には

阿弥陀さまと同じ仏様にまで、この私を育て
て下さるのです。ここまで、面倒を見てくだ
さるのが阿弥陀さま。だからこそ、法然上人
も、ただただお念仏をお称えるのですぞと
おっしゃいます。そのためにも、阿弥陀さま
と離れることなく、お念仏と離れることなく
呼び続けるということが大切です。

お十夜は感謝するだけでは足りません。そ
こにお念仏が出てこないといけません。そも
そも「十夜」という語は『無量寿経』に出て
くる「十日十夜」のことです。「この世で善
を修すること十日十夜した方が仏の国で千年
するより功德が勝れている」と説かれている。
それほどこの世で善をつむことが難しいので
す。そうした中であって、お念仏こそはどん
な善行にも勝っていると説かれます。です
から、十日十夜にお念仏を称え、善をつみなさ
いと教えられます。お念仏をお称えすれ
ば、阿弥陀さまは、間違いなく応えて下さる
のです。まさに特別な時だと心得て、お念仏

を重ね、信仰を深める機会にすべきでありましょう。

さて、お十夜は夕暮れから夜に法要が修されることが多いため、子供も幼稚園や学校から帰って、参加することが出来ます。そこに、ありがたさもあります。私の近隣のお寺では、どこでも幼稚園さんが法要に加わるため何かほのぼのとして、あたたかさも増します。ただ、幼稚園児のような小さな子供は、長時間、着物を着て冠をのせていますので大変です。不安そうに、いつもママの方を気にしながら参加しているのです。ママを見ると安心する。そんな光景をいつも見ます。ああ、ママがいてくれるだけで不安も消えるのだなと法要ごとにつくづく思います。

幼稚園の先生に聞きますと、初めて入園した園児の四月・五月はそれはそれは大変なのだそうです。ママ、ママと泣いている園児が大勢いるそうで、平気な顔をしていた子にまで伝染していくといいます。考えてみれば、

今まで一日中、ママと一緒に時間を過ごしてきたのに、いきなり初めて違う時間を過ごすというのですから、幼児にとっては革命的です。でも、家に戻ると、もう安心。そこにはママがいます。たとえば、部屋で積み木遊びをしている。ママは夕飯の支度で台所に立っている。ママの姿が見えなくても、「ママ」と呼べば、台所から「なー」とかえってくる。声かけてママの声がかえってくるだけで、また、そこにママがいてくれるだけで安心なのです。そこに不安はありません。

お念仏のみ教えもまた、同じでありましょう。阿弥陀さまが今まさにそこにいらして下さる。その、今いらして下さるそのことだけで何か安心した気持ちになります。そして、迷いの中で苦しむ私に、必ず救うぞと声をかけて下さるのです。私はただただ、阿弥陀さまの名を呼ばせていただいただけなのであります。呼べば必ず応えて下さるところに喜びがわいてくるのであります。

ところで、今年の夏はオリンピックで日本が感動いたしました。今こうして秋の虫の声を聞き、山々が色づいている様を見ておりますと、あの熱い戦いが、かなり昔のようにも感じます。しかし、一つ一つの感動のドラマは私どもの脳裏に焼きつき、多くの勇気を与えてくれたように思います。勝った選手ばかりでなく、負けた選手にもたくさんの方の拍手と拍手がおくられました。

その数々の感動のドラマそれぞれに、どれも素晴らしく、忘れられないものばかりでありましたが、私がとりわけ感動し今でもその映像が目に残っていますのは、柔道女子六十三キロ級で金メダルを獲得しました谷本歩実選手であります。今回のオリンピックにおいては、柔道で多くの金メダルを獲得しました。期待されながら、惜しくも金メダルを逃した選手もいたわけで、選手一人ひとりに様々な歴史が刻印されました。その中で谷本歩実選手が一番印象深く残っていますのは、

やはり、着実に勝ちを進め、最後優勝を決めた時、これまた、かつて金メダルを獲得した古賀稔彦コーチに飛びついていった姿がなんとも言えず感動したからであります。

古賀コーチと二人三脚でやってきて、谷本選手の実力もさることながら、古賀コーチの指導してきた思い、何としても金メダルを獲得させてやろうという意志が通じたのだなと思いました。アナウンサーの方が「横にいる古賀コーチと同じ金メダリストですよ」と言われた時、涙を浮かべて心から笑みをこぼされた谷本選手の顔が今でも忘れられませんが。同じ金メダリストにまでもしてもらったのだなあとという点で、谷本選手のうれしさもさることながら、古賀コーチの何としても同じ金メダリストに育ててやろうという熱い思い、何としても金メダルを獲得するために応えていこうという心が、ひしひしと伝わって参りました。

阿弥陀さまも何とかして、この私を救い、

自分と同じ仏にまで育てようとして下さっており、どうしようもないこの私ですが、何としてでもという阿弥陀さまの心があるのです。阿弥陀さまに導かれて仏の道を歩むことができるのです。本来であれば、絶対に救われない私なのです。それが救われるというのは、ひとえに阿弥陀さまのご本願によるところ。そのご本願を成就されたことへの報恩感謝としてお念仏を修すこの十夜法要が、どれほど尊く、ありがたいものであるかわかりただけなのではないかと思えます。

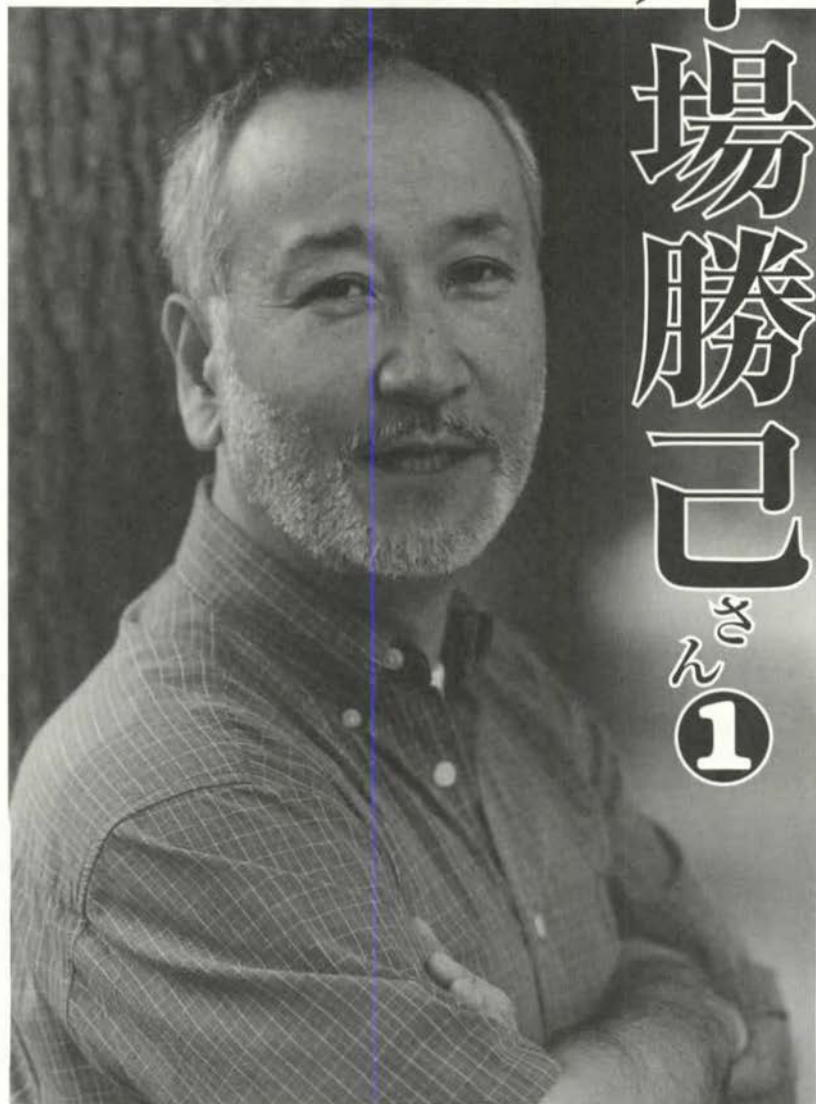
現在、浄土宗お十夜の発祥地ともいわれる大本山鎌倉光明寺のお十夜法要は、十月十二日の開白法要に始まり、十五日の結願法要までの四日間厳修されております。全国各浄土宗寺院でも三日、二日、一日と日数こそ少なくなっていますが勤められています。十日十夜の長さが短くはなっていますが、大切なことは法要の日数の長さではなく、ご本願に出

会えた喜びから、お念仏を申し、それを命づきるまで相續していくことであります。阿弥陀仏さまと決して離れることなく、お念仏と決して離れないことです。それがお念仏の相續、続けていくということなのです。毎年お十夜を迎えますたびに、この一年間どれほどお称えさせてもらったろうかと申し訳なく思うこともあります。それに対し阿弥陀さまはどれほど、この私を救おうとして、声をかけて下さっていたか。申し訳ないという思いから、お念仏の一声が重なり、念仏信仰を深めさせていたでいることであります。

わが名を称える者はいないかと、いつでも、どこでも、どんな時でも御目をこらし、御耳を傾けていらつしやる。そして称えた者を仏にまで育てようとして下さる。その阿弥陀さまのおっしゃるままに、お念仏を称えることこそがお十夜の正しい、尊いうけとりであるうかと思えます。

連載

会いたい人
関 容子



木場勝己
さん
①

平成十五年は木場勝己さんが一挙に脚光を浴びた年で、一月に芸術祭賞、二月に読売演劇大賞の最優秀男優賞を受けた。読売の受賞式というのがちよつとユニークで、各部門の最終選考に残った何人かの優秀賞の人がまず客席からステージへ呼び上げられ、最後に最優秀賞の人の名が呼ばれて颯爽と登場、ということになる。優秀賞の中に好きな俳優の顔が見えたりすると何とも複雑な気になるが、このときの最優秀賞はかねて最良の木場さんだったので、私も晴れ晴れと拍手を送ることができた。

受賞の対象となったのは、井上ひさし作『太鼓たたいて笛ふいて』の、林芙美子の家に足繁く出入りして戦中戦後を豹変しながら生き抜く賑やかな男の役と、坂手洋二作演出『最後の一人までが全体である』の、学生運動が下火になってからも大学寮に居残って一人闘い続ける教授の役。言わば動と静の舞台における「抜群の安定感と説得力ある演技」

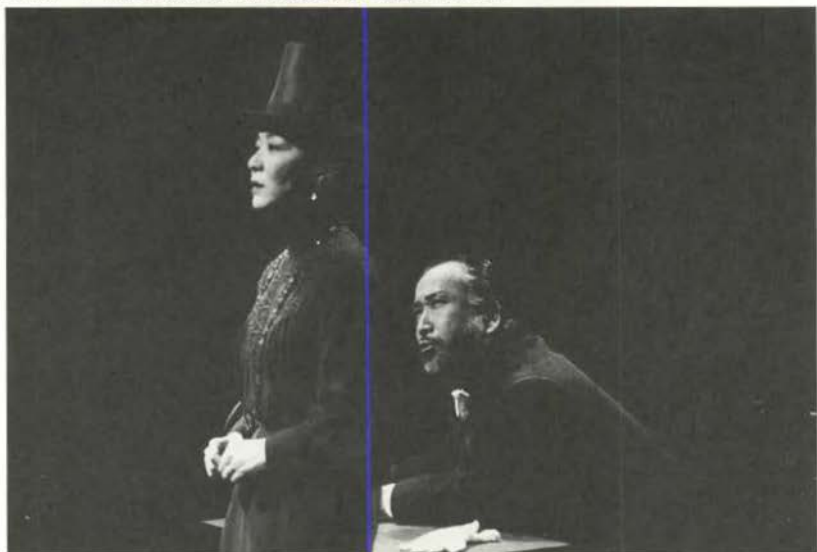
が評価されたのことだった。

木場さんは照れながら、「えー、小学校の運動会以来の受賞です。尊敬する立川談志さんからのお手紙では、賞はもらっちゃえばこちのもの、絶対返すな、とありましたが、万一、何かの手違いだったとしても決してお返し致しませんから」とスピーチして笑いを取った。こういうにはかみ方は東京下町つ子特有の気質だろう。深川の木場で生まれ育ったので、芸名を木場にしたら、という由来をあとで聞いて納得した。

ところで木場さんと談志師匠とのつきあいはどうやって始まったのか。

「平成七年ですか……ぼくがNHKスペシャルの『新藤兼人が読む病牀六尺』で正岡子規の役をやらしていただきましたが、その翌年、あるパーティーの席で師匠に声をかけられて絶賛していただいたんです。それからはいちよい舞台を覗に来てくださるんだけど、この間の『太鼓たたいて』のときは楽屋へ寄

平成5年、T・P・T公演の『ヘッダ・ガブラー』（写真上）と
『エリーダ〜海の夫人』（写真下／ともに演出はデヴィッド・
ルヴォー）での木場勝己さん。共演はともに佐藤オリエさん



らずに帰っちゃいましたから、多分気に入らなかつたんでしょう（笑）

私が木場さんの舞台に注目し出したのは、平成五年あたりから続けてデヴィッド・ルヴオー演出による『テレーズ・ラカン』『ヘツダ・ガブラー』『エリーダ／＼海の夫人』を続けて観てからで、その後も松本幸四郎と共演した『オセロー』のイヤ／＼役や、テレビの主演デビューを果たした『病牀六尺』の子規役に瞠目し、ずっと目を離せない存在になった。

そうかと思うと読売の受賞パーティーが宴たけなわになったころ、妹尾河童さんの差し金で『座頭市』を歌ったり、かなり前にはテレビの『銭形平次』でガラツハをつとめていたこともある、という経歴を知って、木場勝己という役者の芸幅の広さに、ひどくびっくりしたのだった。

木場さんはどんな少年だったのだろう。

「特別に演劇少年じゃなかつたです。しかし親父に連れてかれて、うちの近くだった明治座に新派や新国劇をよく観に行きました。生意気にも渋い大矢（市次郎）さんのファンでした。そのころお袋に袴をこしらえてもらって、腰におもちの刀をさして町内を練り歩いた覚えがあります。親父にかつらを買ってくれ、と言ったら、本物は高いからダメだ、って言われて、しばらくしたら夜店で売つてようなセルロイドのをあてがわれて（笑）。でも喜んでそれかぶって闊歩してましたから、まんざら芝居が嫌いじゃなかつたんですかね」

淡い初恋は四つか五つのころだった。

「保育園に上る前だったか、キヌコちゃんというきれいな子に、結婚を申し込んだらしいですよ。お袋の話だとそのときの台詞は、俺のおっかあになつてくれないか（笑）。親父は木場の材木屋ですけどおっかあなんて言葉は使わないし、多分明治座で仕入れたのかも

しれません。もちろん即座に断られましたけどね」

二度目の相手は、保育園で隣同士の席だった観音堂写真館の一人娘のテルミちゃん。

「キツカケは、ぼくがお弁当のふたをあけたら真っ黒……つまり海苔弁でやつで、今日もガツカリをおかずに食べるのか、と思つてたら、これ上げる、つてテルミちゃんがうまそうな玉子焼きをボンと乗せてくれたんです。誰だつてこれは俺が好きなんだ、と錯覚するじゃないですか（笑）」

それからの二年間はテルミちゃん一辺倒だったけど、そこに強力なライバルが現われる。

「印刷会社の社長の息子で、これが様子のいいやつでした。ぼくなんかいつも身体に合わない大きなスポンをはかされているんですが、そいつのそこは金持ちだから、パチンパチンのピツタリしたやつをはいてくるから恰好がいい。弁当にしても、お昼になるとお手伝いが届けてきて、しかもバナナが一本つい

てるんです。あのころのぼくらは遠足のときしかバナナにお目にかからなかったですからね。当然のように、テルミちゃんはそっちになびくわけですよ（笑）」

耐えかねた勝己少年は、卒園間近のある日、庭のお砂場で仲間を集めて泥団子合戦を挑む。「一人が三十個くらいずつ泥団子を前に積み上げて、その様子のいいやつと子分ども、片や貧乏人組、という二派に別れて合戦開始なんですけど、めざすは彼一人です。ぼくは泥だらけになつて苦戦しながら、最後の一発をエイッとはかりに投げつけたら、それがなんと、ワアーツと歓声をあげてたそいつの口に命中ですよ。やつはみごとにお菌黒野郎になったわけです（笑）。ヤツが初めて泣いたんですよ、そのときに」

しかし勝った結果が、必ずしも木場さんの思うようには行かなかった。

「二枚目男にはいつでも負ける、ということをお思い知りました。テルミちゃんは泣いてる



お菌黒野郎を優しく介抱しながら、キツとこちらを振り向きざまに、カツちゃん嫌い！
って言ったんです。これ、現在の役回りをピツタリ予言してますね（笑）

このほろ苦い物語には後日譚がある。間もなくの小学一年生入学式のあと、母親に連れ

いわくのある観音堂写真館で撮られた小学校入学祝いの記念写真(上)と、生後八ヶ月半の写真。木場さんは昭和二十四年暮に江東区の木場で生まれた



られて観音堂写真館に行く羽目になった。

「いやだ、つて泣いて逆らいましたよ。母親はなんでそんなにいやがるのか、理由を知りませんから、無理矢理引っぱっていくわけです。それで屈辱に満ちたひどい顔の記念写真ができてきました。この間、何十年ぶりかでそのあたりを車で通ってみたら、まだありましたよ、その失恋写真館が（笑）」

木場さんの魅力の一つは、その淡々としながら深く内面を照らし出すような低い声の台詞術にある。新藤兼人監督が『病牀六尺』の主役に木場さんを抜擢したのも、ベニサン・ピットで観た芝居の木場さんの声に魅かれて、と聞いた。その木場さんは小学校入学のころから六年生くらいまで、ずっと吃音の少年だったとは意外な話だ。まさか失恋のショックからでもないだろうけれど。

「五つくらい年上の子に吃音の少年がいて、その真似をしていたら……という自覚がある

んですが、のちに調べたらあんまり根拠がなく、キツカケにはなっても原因にはならないそうなんです。どうも言葉を選ぶときに二者択一を迫られるとか、子供ながらに心の葛藤があつてのことだったと思います。もし真似が原因になるなら、役者になってから吃音の役をやったけど、戻ることはなかったですから」

ところで木場さんは戦後生まれだが、戦時中旧満州（中国東北部）で生まれた兄と姉がいる。両親が祖父母と幼児二人を抱えて引き上げてくるときの過酷な体験は、並大抵ではなかったという。このことを知ったのは、木場さんの母西村操さんの『旧満州 遼陽郊外』という本の、散文詩のように美しい文章による。

「ええ、戦後、母は高田敏子さん主宰の『野火』という詩の雑誌の同人でした。父は戦時中は満州で部隊建設の仕事をしていたのですが、日本から軍用の材木が届くと、そのさばき方の手際が鮮かだったんで、すべてが、

漫々的マンマンでばおつとしている中国人はびっくりして眺めてた、って書いてますね」

哀切なエピソードが多い中で、数少ない笑える話は、今日の木場さんを彷彿させる、茶目チャメつ氣たつぷりで氣骨のあるそのお父さんのこと。

「引揚げのときに、日本人の足許を見ては品物を買ひ漁る、売買屋バイアイヤというのが出沒し出して、ある日、父がかつての上司の家に行ったら、あまりにもひどい値をつけるんで、カツとなつて怒鳴ったんですって。そのときはびっくりして逃げて行つたんですが、夜になつたら大変だ大変だ、やつらが仕返しにくるから、西村さん、早くその髭を剃つて、頭も坊主にして、かくれてください、って伝令が来たんだそうです」

西村操さんによると、「多々タタタ的毛有モウヨウの西村大人シムンダイジン」は、「漆シのように真つ黒な髪も、目と口丈の顔中の髭も、おばあちゃんがつるつるに剃り上げて」、「笑わずにはいられない別

人」にされる。まるで歌舞伎の『引窓ひまど』の老母が、我が子の濡髪長五郎の大前髪を剃り落して追手からかくまおうとする場面のような。「そうなんですよ。父を捕えに來た売買屋たちも、俄か坊主になりすましてしかも作り声でしゃべる親父にはまったく氣づかないで（笑）、帰っちゃった。そのあとでみんなで大笑いした、っていうんですよね」

木場さんの顔中髭の濃いところも、もちろん芝居シブイところのあるところも、この父親のDNAに違いない。

「いつの日かこれを映画化してみたいと思つて、シナリオにも何度か挑戦したんですが、時代背景とかいろいろ考証が大変で難航しています。でも一番大変なのが資金面で、つい先日シムンも決りかけた別の恋愛物の企画が、スポンサーに逃げられて流れちゃったところですよ」

（つづく）

問ふて曰く、臨終の一念は百年の業にすぐれたりと申すは、平生の念仏の中に、臨終の一念ほどの念仏をば申しいたし候まじく候やらん。答ふ、三心具足の念仏はおなじ事なり。そのゆえは、観經にいはく、三心を具する者は必ず彼の国に生ずといへり。必の文字あるゆへに臨終の一念とおなじ事也。

（『十二問答』）

問う。「最期臨終に称える一遍のお念仏の功德は、常平生に百年間積んできたお念仏を集めた功德よりもすぐれている」と言われるのは、平生のお念仏では、臨終に称える一遍のお念仏ほどに真摯に称えることができないからでしょうか。答える。（そのように言われているのは誤りです。臨終のお念仏であろうが、平生のお念仏であろうが、至誠心・深心・廻向発願心という）三心を具えたお念仏であればその功德はまったく同じです。なぜなら『観無量壽經』に「三心を具えて念仏を称える者は必ず極樂浄土に往生する」と説かれているからです。「必」の一字が經文に説かれているのですから臨終に称える一遍のお念仏も（常平生のお念仏も）同じように浄土往生が叶えられるのです。

凡夫の勘違い——ひとりだちのお念仏——

人間という生き物は、気の持ちようひとつで、普通では考えられないほどとんでもなく大きな力を発揮するようである。昔から「火事場の馬鹿力」といわれるように、火事や地震の被害に遭った方が、普段は動かすことさえできない重たい家具を持ち上げて幼いわが子を救ったなどといった報道がしばしば流される。あるいは、やはり昔から「病は氣から」といわれるように、現代医療では完治を望めないような重い病魔に襲われ、医師から見放された方が、心機一転、民間療法などを取り入れて奇跡的に命を長らえることもある。さらに、オリンピックをはじめとするさまざまなスポーツの場では、個々の選手が、追いつめられた状況をステップの場に変し、予期せぬ好記録を生み出すことも多い。ことほどさように、切羽詰まった状況が人間の心を追い込み、その思いが身体へ働きかけ、思いもしない好結果をもたらすことがある。

ところで、生身の人間にとって、もつとも切羽詰まった状況とはいかなる場面であろうか？ 言うまでもなくそれは、自身の最期臨終の場であろう。一人ひとりの人間にとって、わが命尽きるその瞬間こそ、もつとも切迫した状況であることに異論を差し挟む余地はなからう。そして、お念仏の教えに縁を結んだ方が、そうした状況に立たされれば「阿弥陀さま、なんとかお救いください！ お浄土に往生させてください！」

と、これまで以上に真摯な心持ちでお念仏を称えることは疑いない。

と、ここまで書いてきた流れに概ね間違いはなからう。とはいえ、法然上人の透徹した人間洞察を理解できず、なまじつか浄土教を学んだ者は、ともすると次のような結論を導き出してしまふ。「最期臨終に称える一遍のお念仏の功德は、常平生に称えるお念仏の功德よりも比較にならないほど勝れている。なぜなら、臨終にあたり私たち人間は、葉にも縋るような切羽詰まった状況に追い込まれ、それまでとは比較にならない程、真剣かつ真摯にお念仏を称えるからである。そうした私たちの思いを阿弥陀さまが汲み取ってくださらないはずはない。まさに一念岩をも通すのである」と。一見、こうした結論はもつともであり、常識的見解に映ってしまう。実際、聖道門の僧侶ばかりか、法然上人門下にもこうした主張をされる弟子が多かったのである。

しかし、冒頭のご法語において法然上人は、当時流布していたこうした常識、すなわち、最期臨終に偏重した当時の風潮を戒め「そうした理解は甚だしい誤りで、最期臨終のお念仏も、平生のお念仏も、三心が具わっていればその功德はまったく同じであり、両者に質的な相違はまったくなく」と指摘された。無論、法然上人によるこうした主張が、その徹底した人間観に基づいていることは言うまでもない。

ともすると現代においても、私たち愚かな人間は、その分際もわきまえず、最期臨終における状況を鑑み、その際の切羽詰まった心境で称えるお念仏を、日常の心境で称えるお念仏よりも功德があるものと考え勝ちである。しかし、こうした思い違いも、突き詰めて考えれば、私たち人間の心の働きが、お念仏、もしくは、浄土往生の何らかの助けになるのではないかという驕り高ぶりから生じた誤解に他ならない。法然上人が見出された選択本願念仏は、どこまでも「ひとりだちをせさせて、すけをささぬ（ただそれだけを独立させて、その他に何の「助け」も添える必要などない）」（「つねに仰せられける御詞」）行なのである。したがって、「阿弥陀さま、どうぞこの私をお救いください」という思いに集約される三心を具えたお念仏であれば、いつでもどこでもわずか一遍のお念仏の功德で浄土往生は叶うのである。

幾分、心を静めて考えてみれば、意識をはっきりさせて自身の臨終を迎えている方がどれほどいるものだろう。不意の病や不慮の災害に襲われて命を落とす方も少なくない。こうした、それこそ千差万別な人間の最後のありさまを十二分にご存じだったからこそ法然上人は、生涯にわたって決してお念仏を手放さないようにと、念仏相続の大切さを訴え続けられたのである。

合掌（天正大学専任講師・林田康順）

眞榮山 袖

SCREEN

シネマ随想

春夏秋冬 そして春

監督 キム・キトク

小泉堯史監督の『阿弥陀堂だより』において、北緯三六度五五分、東経一三八度二〇分の山里の「四季」そのものの映像を与えたインパクトの鮮烈さは記憶に新しいところだが、ほぼ同緯度、九度ほど経度の若い山の湖の「春夏秋冬そして春」をタイトルとするこの作品に溢れる自然美の眼福を享受しつつ、地球上に「落葉広葉樹林」が存在することの

平成16年10月下旬、
Bunkamuraル・シネマにてロードショー



恩恵、このような生命体に進化を遂げるまでの、奇跡に近いプロセスに畏敬に近い感動を禁じえなかった。

古今東西を問わず、人生を四季に準える発想があつて、例えばウォルター・ヒューストンの歌つた『セプテンバー・ソング』は「五月から一二月までは長丁場だが、九月まで来るとめっきり日が短くなる」と切り出すが、奇しくも、この作品の始まる「春」も五月である。濃淡とりどりの新緑が山の湖に映える夜のとばりが下りるとコノハズク（声の仏法僧）やアオバズクの声が四囲にこだまする。

湖面を漂う「浮御堂」に和尚さまと二人で暮らす雛僧。御堂の本尊さまは坐高四〇センチほどの石のお釈迦さま。その台座自体も水に囲まれていて緋鮒が色彩を添えている。石の水鉢の中央に石の台座が据えられているのだ。和尚さまは毎朝、筆を使って石像のホコリを払っていらつしやる。

和尚さまが自在に操る小船が湖面を滑り、

岸辺近くに建つ金剛門の扉を開くと、むせかえるような新緑の森。薬草摘みの作務の筈がいつしか湖に注ぐ清流に入りこんで、カワムツみたいな魚を捕え、あろうことかヒモでグルグル巻きにし、しかもヒモに石片をくくりつけて水中に放ち、ヨロヨロ泳ぐ姿に歓声を挙げる雛僧。トノサマガエルみたいな蛙、ヤマカガシみたいな蛇にも、同じ非道を行う。

師僧は、芥川の『クモノ糸』ラストシーンのお釈迦さまのような眼差で見守っているが、その夜、熟睡中の雛僧の背中に直径二〇センチほどの扁平な丸石をくくりつけてしまう。目が覚めて「背中に石が生えちゃった、早く取って」との哀訴に「三匹を捜し出して石を取ってやれ。一匹でも命がなかったら、お前は心の中に石を背負って一生すごすのだ」との託宣がなされ、石を背負ったまま岸辺から岩肌をよじ登って搜索の結果、ただ一匹を自由にすることはできたが、残りの二匹は絶命している。雛僧の号泣によって完結す

る「春」のラストシーンが、「夏」以降のプロットを予告する。

「夏」に少年僧は恋におち、本尊仏を背負つて下山する。「欲望は執着を呼び、執着は殺意を呼ぶであろう」との師僧の予言が不幸に的中して、かつての少年僧は殺人犯として心の故郷に石仏を抱いて逃避する。「秋」である。師僧もめっきり老いた。紅葉の逆光シヨット。激情の色。憤怒の色。老僧は堂の前面に広がる外縁の板の間に、優しく胸に抱いたネコのシッポを筆として、「般若心経」の墨書を始め、その一字一字をナイフで刻み込むことを弟子に命ずる。日暮れから翌朝まで写経と刻経の完了とともに昏倒した殺人犯の傍らでは、追跡して来た二人の刑事と老僧との手によって一字一字に彩色が施されて行く。三人を見送った老僧は小舟を自らの茶毘場に仕立て、火定を遂げる。

「冬」全山白雪。湖面は完全結氷。刑期を修了し身心ともに充実感ほとばしる「ますらお」

が帰つて来た。堂内の導師席にキチンと揃えられた作務衣の上には、かつて虐殺したへびに変身した師僧が待ち侘びておられる。経机に遺された冊子『佛教金剛霊現』に指南を仰ぎ氷上、身心のさらなる修練に勤しむ。置き去りにされた幼児と共に再生を志すに当り、脇壇ていが幀画の背後に秘められていた半跏思惟像を抱き、石臼を引摺りながら冬木立の山腹をよじ登る。胸中去来するのは「石を引摺らされた」三匹のイメージ。眼下に湖面とお堂を遠望する山頂に石臼を台座として尊像を安置し、自らも禪三昧に入る。

そして「春」マンサクやツツジの咲き乱れる落葉樹林。山頂から菩薩の慈眼が注がれる浮御堂では、雛僧がカメをいたぶって歓声を挙げてゐる。人間の性は変わらなくとも、自らの禍ちを弟子に繰り返させまいとの祈りを籠めて山頂に安置された、尊像の護念の躍動を象徴するが如く、梢の芽吹きには万物を包擁する「いのち」が蠢動している。 長野・十念寺住職

表紙のことは

10
月

太秦の牛祭

長和元（1012）年、恵心僧都源信の受けた夢告によって始まった奇祭。広隆寺の阿弥陀如来を拝し、念仏会を修し、念仏守護のために摩陀羅神を勧請した。恵心僧都自ら草した祭文が現在でも読みあげられる。摩陀羅神とは、天台宗で常行三昧堂の守護神、あるいは玄旨帰命壇の本尊として祀られる神。真っ白な顔に三角形の鼻、大きな耳を持ち、行灯冠を着け、牛に跨って登場する。広隆寺境内、秦氏を祀る大酒神社の十月十日の祭礼として定着したが、中断と復活を繰り返し、昭和56年に復活したものの、以降必ずしも毎年は行われていない。

日本酒 の ことば 日本酒 の じかん その一 酒米

ある秋の夜、行きつけの四谷の居酒屋Yのカウンターでこの原稿のテーマを何にしようかと考えていると、ご主人のKさんと、ふと台風の話になりました。「今年は台風の当たり年だったから、お米の出来も心配ですねえ」。私が問うと、「いや、酒米の出来は悪くないようですよ」という返事。こよなく日本酒を愛し、日々研究精進を欠かさないKさんの言葉は、信頼度抜群です。ああ、良かったと思った途端、テーマについても閃きました。少し前置きが長くなりましたが、今回は、Kさんの多大な協力を仰ぎ、「酒米」にまつわるお話をご紹介します。

日本酒ファンの方ならもうご存知の方も多いとは思いますが、食べておいしいお米と、日本酒造りに向く酒米とは、ちょっと違います。酒米は普通のお米より大粒で、心白（中心部のでんぷん質の部分）も大きいのです。そして、酒米にも種類があり、最近では、青森の『華吹雪』や『豊杯』、山形の『龍の落

とし子』など、その地方の風土に合った酒米の開発も進んでいるそうです。しかし、全国的にみると、たぶん一番有名なのは「山田錦」で、なかでも、兵庫県加東郡東条町の特A地区で作られる「山田錦」は最高品質の酒米とされ、多くの蔵の垂涎の的です。ちなみに、その特A地区の「山田錦」にこだわって造っているお酒としては、『義侠』（愛知県・山忠本家酒造）などが知られています。

「ただどね、特A地区のすぐ側で作られている「愛山」という酒米も、すごく面白いんですよ。戦前までは「門外不出の米」とされ、一般にはほとんど出回っていなかったのですが、数年前に、『十四代』（山形県・高木酒造）が愛山を使ったお酒を造って、一気にメジャーになったんです」

そんなKさんの言葉にひかれ、早速、愛山という酒米を使って造られた『来福』（茨城県・来福酒造）の純米吟醸酒をいただいてみました。爽やかな香りがあり、酸味がすつと



藤原理加

○取材協力／東京・四谷『萬屋おかげさん』主人・神崎康敏氏

立っていて、キレがあつて。今宵の肴、とりと脂ののった秋刀魚のお刺身などにもよく合つて、すごく好みの味です。でも、Kさんによると、この愛山は、扱いがとても難しい酒米でもあるのだそうです。たとえていうと、扱いやすく（造りやすく）味もよい山田錦を優等生だとしたら、愛山は暴れ馬のようなお米。うまく行つたらすごいんだけど、失敗したら目も当てられない——。一度挑戦したものの突然、途中で発酵が止まったりして、「もうこりこりだ」とため息をついた杜氏さんもいたそうです。だけど、何が成功・不成功の分かれ目なのでしょう？　じつは、それこそが、「人の手七分、天の利三分。人類最高の技術で醸される酒」とも称される、日本酒の魅力でもあるのです。それを、Kさんは、こんなことばで表現してくれました。

「結局、お米と酵母との出会い、蔵との相性なんでしょうね。たとえば『来福』さんは、ペゴニアやアゼリアなどの花からできる花酵

母を積極的に使つたりと、酵母のほとんどを自社で培養しているのですが、そんな蔵の個性（まだ三十代前半の若い杜氏さんの個性も含め）と、愛山がうまく合ったんでしょうね。さらに、今年の仕込みでは、昨年とはまた違う酵母で造ってみようとも考えているようですし、どうなるのか、さあ、お楽しみですね」

たとえ同じお米を使つても、出来上りの味は、蔵の個性によって千差万別。それさえも、毎年同じになるとは限らない。じゃあ、今年実つた酒米たち（もちろん愛山だけでなく）は、来年、全国の蔵々で、いったいどんなお酒になつてくれるのでしょうか？

情熱を持った若い人の蔵、あるいは無名蔵の名酒を見出すことに尽力しているKさんのお店で、また新しい日本酒の楽しみと、若々しい佳酒を教わりました。すっかり嬉しくなった私と友人は、声を揃えて、空になった片口のお代わりをすかさず注文。秋の夜長、今宵も、酒宴はまだまだ続きそうな気配です……。

法然上人を
めぐる人々

一の谷



◆第十回◆

石丸晶子

絵・石川忠夫

（十三）

本三位中将重衡は、新中納言知盛とともに平家方大手の大将として、総勢四万余騎で生田の森の陣をかため、やはり源氏の大手である範頼軍勢五万余騎と戦っていた。

大手同士の戦いでは勝敗がつかずにいたところに、背後から鉄拐ヶ峰や一の谷の平家方を攻め落とした源氏の搦手^{かみで}が押し寄せてきたのである。

挟み撃ちに遭ったのでは勝目はない。平家四万余騎は大混乱に落ちていった。

四万余騎といっても、源氏が東国各地の武士団を中心に主に忠誠心^{あこ}を抱き、組織化された軍勢であったのに対し、平家方はしっかり統率のとれた軍勢ではなかった。

もとはといえば山陽道八か国、南海道六か国の戦に勝って本拠地屋島から福原まで攻め

上がってくる道中、その諸国からにわかに駆り集められた烏合の集団であったのである。

源氏の東側の大手軍と、西側から迫まる義経率いる搦手軍とに挟まれて、平家四万余騎の兵たちは戦う意欲などあればこそ、そんな意欲などたちまち喪失し、蜘蛛の子を散らしたようにいっせいに思い思いの方角に逃げ散っていった。

重衡のもとには一万余騎のおびただしい軍勢が重衡を守って布陣していたけれども、あつという間もなく総崩れとなった彼等は、大將軍のことなど打ち忘れてみな落ちてゆき、気づいた時には重衡は、乳人の後藤兵衛盛長という中年の武將と主従二人だけになっていた。

この日の重衡の装いは、黒に近いといつてよい濃紺の地に白糸で千鳥の群れを刺繍した鎧直垂を着し、内大臣宗盛が秘藏していたの

を受領した名馬童子鹿毛に乗っていた。

乳人の盛長も、三つ目結の直垂に、緋緘ひざしの鎧を着、夜目無月毛よめなしつきげという馬に乗っていた。重衡から拝領した名馬であった。

二人連れ立って落ちていった。その装束といい、またがる馬の姿といい、遠くからでも一目で名のある平家方武将とわかるいでたちである。

生田から湊川、狩藻川をざぶつと馬で駆け渡り、駒の林を左手に見て、蓮の池を右側に見、打ち過ぎ、打ち過ぎゆくうちに、摂津と播磨の国境須磨の関に近づいた。

生田の森からここにいたる道中、右手には六甲の山なみが連なり、左手はすぐ海である。渚には平家方の船が数多く浮かんでいるけれども、重衡は後から続々と続いて追って来る敵に追われ、船に乗り込むゆとりとてなかった。

やむなく、陸路をただ一直線に、ひたすら西をめざし、須磨の関近くまで馬を走らせていた。

(十四)

源氏児玉党の庄の四郎高家は、その装束、その乗っている馬からして、これは平家に名のある武將に違いないと目星をつけ、生田の森から他の落ち武者には目もくれず、ただ重衡主従だけを目がけて長追いしていた。

須磨の関近くまで長追いしてきたときである。

「相手が乗る馬はなかなかの駿馬だ。このまま西へ西へと長追いし続けても追いつけるとも思われぬ。逆に間隔がどんどん開いてお逃がししてしまおうぞ」高家は思った。

そこで彼は乗っている自分の馬を走らせながら、ひようと馬上から矢を放った。

高家は矢の名手であった。矢はまがうことなく前方を走る重衡の名馬童子鹿毛の尻に突き刺さったのである。

重衡と並んで夜目無月毛を走らせ、一斉に逃げ落ちていた盛長はハッとしてそれを見た。

瞬間、盛長の心を襲ったのは

「本三位中将殿の馬はもう駄目だ。きつと中将殿は私の馬を取り上げ、わが馬に乗り換えて逃げようとされるに違いない」という恐怖であった。

そうなれば、自分はここで討ち死にするの

である。

真つ黒な死の恐怖が盛長を襲った。

武士としての恥も、乳人としての愛情も盛長の死の恐怖の前にはなかった。

何としても逃げ落ちねばならぬ。

彼はとつさのことに鎧についている平家のしるしの小旗を、むんずと引きちぎり、かたぐり捨てた。平家の小旗を捨て去れば、盛長が源氏方か平家方か、落武者かそうでないか、すぐには判らぬであろう。

死の恐怖にさらされた盛長のとつさの知恵であった。

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門
古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)384211289
振替00180245231



さつと彼は馬に鞭をあてる。

尻に矢が刺さり、速力が落ちはじめた重衡の馬をしりめに、盛長が乗った夜目無月毛はさつと速度を速めて駆け去って行った。

「どうした、盛長」

と重衡は駆け去っていく盛長のうしろ姿にむかつて叫んだ。「われらを捨ててどこへ行くのか。主従の誓を忘れたのか。怨めしいぞ」だが盛長はそんな重衡をあとにして、ただ逃げに逃げて遠ざかった。

この盛長には後日談がある。

彼は重衡を見捨て、重衡から拝領した名馬にまたがって無事逃げおおせた。

その後、彼は、どんな縁からか熊野の別当家の法橋（法印・法眼に次ぐ僧位）の後家に使える侍になり、この後家が訴訟のために京にやってきたとき、供としてかたわらにいたという。

一方、重衡である。

彼が乗る童子鹿毛は弱ってくる。うしろから長追いしている源氏の武者との距離は縮まった

（万策尽きた。今はいさぎよく恥をさらす前に自害しよう）

彼は馬から飛び降りた。

刀を抜き、鎧の上帯（うわおび）を切つてのけ高紐を解いて脱ぎ捨てたところに長追いして追いついた高家が馬から飛び降り、重衡をむずと抱き取っていった。

「平家に名のあるお方とお見うけ申す。あなた様を追ってここまで参りました」

重衡は生け捕りになった。

（十五）

熊谷次郎直実は、義経率いる搦手（かみで）の軍勢のなかに組み入れられていた。

だが鉄拐ヶ峰から搦手（かみで）三千余騎が峯下の平

家の陣に駆け落ちようとしていたその夜半、彼は嫡子の小次郎十六歳を呼んで言った。

「どうだ小次郎、考えてみるとこの難所を馬で降りようという時は、一騎打ちにならず、大勢入り乱れての戦になるぞ。してみると誰が一番乗りしたとてない戦場ということになるではないか。功名を立てようにも、こんな戦場では立てようがないわ」

「いかにも父上の仰せられるとおりでございます」と小次郎。

「で、われらは考えた」

「何をお考えでございますか」

「軍規は軍規よ。なれど敵を打ち倒すためのこそ軍規ではないか」

「いかにもそのとおりと存じます」

「で、われらは考えた。これより播磨路に出

て、一の谷の先陣をしようとな」

「鉄拐ヶ峰を駆け下りる方々とは別行動をおとりになるということでございますか」

「そのとおりよ。どうだ、父とともに一の谷の先陣をしようではないか」

「ようございます。父上とご一緒に参りましょう」

この日、直実は黒とも見まがう濃紺の鎧直垂を着、背には敵の矢を防ぐための大きな風袋を負って、地元上野（こうづけ。群馬県）の権田産の名馬権田栗毛にまたがっていた。

水草模様を染めた直垂に白、薄青、紺、の三色で緘した鎧を着た小次郎。

父子二人は二月七日早晩、義経たちが鉄拐ヶ峰を駆け下りる直前、ひそかに源氏の軍勢から離れ、旗持ちの家来一人をつれて主従三騎で播磨路に出、一の谷に向かった。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウオッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

誌上歌集

雨のニルヴァーナ

蓮門小子

傘ひとつふたりたがへの肩濡れて藍に染まりし言の葉となる

柩へと旅券ひそかに入れるゆゑ必ず父に遇へよ弟

詩の生まるたびにひとつが消えてゆく誰もなんにもゐない砂浜

ジョン・コルトレーン忌深く泥濘をわが珈琲として跪く

東京の旅族なるらむ踊るらむロマといふ名のわが生誕祭

此処よりは鬼籍花野を分け入れればわれらひとつの産声となる

そして以後思ひ思ひの夕闇を纏ひてますぐ立ちにけるかも

一本の樹に触れて潮満ちるごとくおとおと鳴る全身のこと

いまだ海生まれぬ右手握りゐてその踊り場に待つ夜々のあり

泣きなさい笑ひなさいと命じおき真夜神々は揭示板拭く

浄土誌上句会

●窓

〈特選〉

銀行の窓口嬢の浴衣かな

中島富士子

市町村役場でもアロハシャツなど、従来の制服でないものが出ている。この句は銀行の窓口嬢である。夏限定で、秋になったらどうするのかわからないが、涼しげで客の受けはよからう。余分なところのないのがよい。

〈佳作〉

車窓開け通勤途上の紅葉狩り

大場 清

西日いま高層ビルの窓焦がす

佐藤 雅子

西日今窓の造花を燃え立たす

石原 新

●間

〈特選〉

古都の家狭き間口に水打てり

周東 澄江

京都の町屋を思い浮かべる。間口はごく狭いのにも奥は驚くほど深く、中程に坪庭があったり、土間が長々と貫いていたりする。間

口で水を打っている。盆地の夏は格別に暑い
が、目は涼しさを伝えてくれる。

〈佳作〉

岩風呂や雲間に出てし夏の月

増田 信子

島の店狭き間口に盆のもの

浜口 佳春

石垣の隙間に日差し穴まどい

金谷 友江

●自由題

〈特選〉

売り物の皿に蚊火焚く陶器市

蘭田 郁子

さまさまの陶器を並べた屋台が並ぶ。その
皿の上にか、蚊やりの煙が上がつている。ま
さか売り物を汚すようなことはなからうが、
「売り物の上に」というのが面白い。見つけ
どころである。

〈佳作〉

蟬時雨樹齡加えし庭の木に

野村多加子

百足這う上がり框や峽の宿

谷 しげ子

子かまきり糸より細き足並べ

山口 信子



参加作品 編集部選

窓

送り火の細き煙や窓の外

中島 一子

マンションの窓の灯消えて月涼し

山本美代子

柳散る川風入れて蔵の窓

金谷 友江

夜更けての窓より見える月涼し

今井 恵子

人恋うる心の窓に影浮かぶ

堀 菅子

貝風鈴窓にみやげの海の香を

嶋田喜代子

車窓より富士を拝みて春の旅

佐藤 雅子

車窓より乗込んで来し植田風

片桐てい女

短夜の窓打つ雨に目覚けり

周東 澄江

明け放つ窓一杯に海花火

河合富美枝

間

子燕の旅立ち間近乱れ飛ぶ

山口 信子

風の間もかすかに揺るる花菖蒲

井村 善也

棚経の間合を測り麦茶汲む

井村 善也

世代間の調和美し盆踊り

石原 新

間をおきて空に上がるや遠花火

伊藤寿美子

泡一つ消えぬ間に注ぐビールかな

村上 青女

自由題

改札に塩素の匂ひ原爆忌

浜 裕子

猫の死をのせ炎天のトタン屋根

鳥羽 梓

梔と蓋ひたどくつつく残暑かな

和田 仁志

少年の背骨なめらか天瓜粉

上目 裕

原爆忌回転寿司の皿を横む

大山 東人

はじかみの新しき身を洗うかな

内藤 隼人

浄土誌上句会のお知らせ

①差題ではありません

私

インク

自由題

締切・二〇〇四年十月二十日
発表・『浄土』二〇〇四年十二月号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-1-7 14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんはネッ



かまち♡よろう



月かげは嵐の後もかわらずに 岱潤

『一枚起請文』における「尼入道」論争はなかなか収まるどころが決まらない。勧学の会議で「尼・入道」説に落ち着いたかように思えたが、「尼女房」説がまだまだ力を持っているようだ。

そもそもこの論争、宗学者ではない我々一般の僧侶にしてみれば、詰まるところどちらの方が差別性がないかに尽きるように思える。

「尼・入道」説は、法然上人が遺言として遺した文章である以上、女性のためだけではなく男性をも含めて当然であるとしている。確かに当時尼僧はいくら修行をしても僧階をあげることが叶わず理想的念仏者として映る。確かに「尼女房」として理解するのは理想的姿を女性だ

けに当てはめているが、男とか女だと区別することなく、人間としての理想として理解すれば、そんなことにこだわる必要はないようにも思える。夫を亡くした女性が再婚をきっぱりと拒否して、その供養に一生を捧げる姿。そして念仏の理解など考えずただ一途に亡き人のために一心に称えるその姿。それこそが法然上人が弟子たちに言い遺したかったことではなかっただろうか。それはまた同時に修行のより実践者である尼僧や、入道の称える姿にも言えることかもしれない。要するに、頭でっかちになるな、自分のことを先とするな、理屈を言うなであったと思うのである。

法然上人の原点に返るためには、やはり大切は御法語である。

(長)

雑誌『浄土』
特別会員、維持会員の方々

巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光門寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮眞(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村眞道(仙台・愚鈍院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
真野龍海(芝・天光院)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)

敬称略・五十音順

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

編集顧問

浄土

七十巻十月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十六年 九月二十日

発行 平成十六年 十月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三)五七八六九四七

FAX 〇三(三)五七八七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

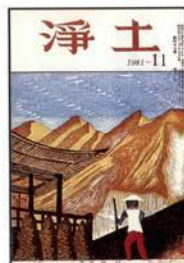
青木照憲

村田洋一

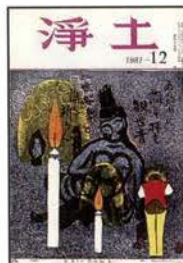
大室了皓



昭和56年10月号



昭和56年11月号



昭和56年12月号



昭和57年1月号



昭和57年2月号



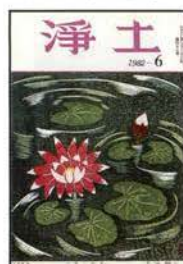
昭和57年3月号



昭和57年4月号



昭和57年5月号



昭和57年6月号



昭和57年7月号



昭和57年8月号



昭和57年9月号



昭和57年10月号



昭和57年11月号



昭和57年12月号



昭和58年1月号

法然上人鑽仰会の

本

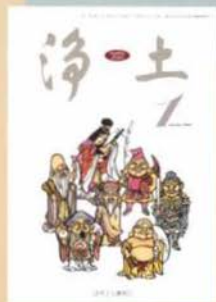


『念佛讀本』完全復刻版
1,600円



『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途裱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット) 800円

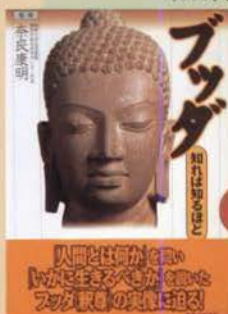


委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話 / 03-3578-6947
FAX / 03-3578-7036